

『紫式部集』注釈史の忘れもの

— 第八、九、十番歌の再検討 —

久保朝孝

かつて「紫式部集の歌一首―おぼろけにてや人の尋ねむ」考」と題して、紫式部集の第三番歌について論じたことがある（樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』平九・笠間書院）。その末尾を、私は次のように結んでいた。

『紫式部集』は、我々の先入観や固定観念に染め上げられていて、作品本来の意義が十分明らかにされていない歌をまだまだ多く抱えている。紫式部貞女観による解釈などはその最たるものといつてよい。現代の制度・慣習・通念ではなく、平安朝の実態に即した物の見方を鍛えたい。宣孝以外に男関係を認めない前提から、もうそろそろ自由になりたいのである。

この部分は、後に工藤重矩の「紫式部集の和歌解釈―伝記資料として読む前に―」（全国大学国語国文学会編『文学・語学』第一六二号・平成一一年三月）にそのまま引用されて、「私の言いたい事もまたこれと同じである」と賛意が表された。工藤は言う。

『紫式部集』注釈史の忘れもの（久保朝孝）

・紫式部集の注釈については冒頭に記したように、源氏物語の研究者を中心に進められてきた。それ故、源氏物語との関連などは随分詳しく究明されたという利点があった反面、源氏物語あるいは源氏物語の作者としての紫式部を強く意識し過ぎて、紫式部その人を明らかにしたいがために強引とも思われる解釈が行われていたと、私には見える部分がある。宣孝とのことなどはその典型と言えよう。また初期に著名で有力な研究者が伝記研究のなかで家集の和歌に解釈を施したことは、後進には頼もしいことであつたが、その解釈に寄りかかつて直に紫式部集と向きあうことを怠らせたとも見える。まことに禍福は同門より入ると知られる。

・家集の中に式部の伝記情報（精神の領域を含んで）を求めようとする前に、あるいはまた虚構とか物語とかをの枠カドをかける前に、まず和歌そのものが何を語っているのかを和歌に即して読

むことが必要であろう。その詞書や和歌から何が言えるのかを冷静に判断し、言える事以上の事は言わないと覚悟すべきである。その覚悟さえあれば、諸々の先行文献の想像に属する部分とそうでない部分との判別は決して難しくはない。そしてそれは紫式部集の注に限ることでもない。

『紫式部集』の注釈的研究の現状について、大略私の認識に重なる見解である。特に傍線部については、自らに向けた戒めとしても拳拳服膺したいと思う。さらに工藤は、「和歌の解釈は一度思い込むとその枠から逃れて、新しく考え直すのはなかなか困難である」とも言っている。まったく同感である。そして、本稿で取り上げる次の三首の贈答歌もそのひとつであるように思われる。従来の解釈ではどうにも落ち着きがよくないのである。にもかかわらず、不思議に諸注釈は小異を抱えつつも基本線では横並びの解釈を変えようとならない。これまでの検討作業の中で、僅かに触れられはしながらも深くは追究されなかつた部分、すなわち「注釈史の忘れもの」に着目して、そこから新たな解釈を探り、あるいは埋もれた解釈を掘り起こしてみたいのである。したがって、事の性質上諸注釈の引用が煩瑣に繰り返されることになるが、やむを得ないものと御寛恕をいただきたい。

なお、引用本文は新日本古典文学大系本により（歌番号も）、一部を通行の表記に改めたものである。

はるかなる所に、行きやせむ行かずやと、思ひわづらふ人の、山里よりもみちを折りておこせたる

八 露ふかくおく山里のもみち葉にかよへる袖の色を見せばや

返し

九 あらし吹く遠山里のもみち葉は露もとまらむことのかたきよ

又、その人の

十 もみち葉をさそふ嵐ははやけれどこの下ならで行く心かは

この贈答歌が抱える問題は、式部へ贈られた八番歌の詞書に「はるかなる所に、行きやせむ行かずやと、思ひわづらふ人」が、いったいいかなる人物であるのか、ということに尽きる。

まず、この点についてこれまでの注釈史をたどってみよう。

竹内美千代『紫式部集評釈 改訂版』（昭四四・改訂版五一・桜楓社）。以下『評釈』と称する。

…同性の間での贈答歌と見るか、異性の間での恋の贈答と見るかで解釈が異なってくる。／私は同性の女友達との贈答と見た。…男性なら任務を帯びて行くので、去就に悩むことはあるまい。…京を最上の所と考えている当時の女性は、遙かな国への同行を逡巡して、思い悩んでいる。…夫と共に任地へ下ることは、女性にとって重大問題である。生涯を託して行動を共にすることである。「思ひわづらふ」にはそういう意味があるのである。女性と見て何ら支障がないように思う。

清水好子『紫式部』（昭四八・岩波新書）。以下『新書』と称する。

遠方の地に行こうか行くまいかと思ひ悩んでいる人は、たぶん式部の女友だちであろう。親戚の娘かもしれない。いずれにしても式部とおなじくらしいの年恰好の女性が、山里から紅葉した木の枝に歌をつけて奇越したのである。…夫の任地が決定して、夫と同行したものかどうか迷っている事情などが考えられる。

山里にいるのは、お寺に参籠でもしているのか。今なら、妻が夫の赴任に従うのは当然のことだけれども、平安時代は男が女の家に通う結婚形式で、女の生活は実家の親が面倒をみたから、夫についてゆくかどうかと迷うことも起きるのだった。

山本利達『新潮日本古典集成』紫式部日記 紫式部集（昭五五・新潮社）。以下『集成』と称する。

都から遠い地方に行こうか、行かずにいようかと思ひ迷っている人。おそらく、夫が国司となつて地方に行くので、夫と一緒に行くかどうかどうしようかと思ひ迷っているのであろう。

木船重昭『紫式部集の解釈と論考』（昭五六・笠間書院）。以下『解釈』と称する。

女友だちの夫は、彼女にぞつこんうちこんでいるらしい。はるかひとりの国の任地へ、いっしょに行こうかと、せがまれるものの、彼女は決断しかねている。一夫多妻の当代、夫の熱意を拒めば、仲はそれきり絶えるかも知れぬ。さりとて、正室に安定しているのでもなさそうな彼女、遠国へ伴われて行った

挙句、かの地でうとまれても、これまた悲劇だ。けだし、子までなして安定した女性ではなさそうである。あるいは、式部よ若い女性なのかも知れない。

（国司ならぬ下級地方官吏の若い妻妾かも知れぬとも言う。）
木村正中『紫式部集全歌評釈』（『國文學』第二七卷一四号 特集「紫式部—源氏物語への回路」特別企画・昭五七・學燈社）。以下『國文學』と称する。

…縁者の地方赴任とともに、下向しようかしまいかと迷っている女性。…赴任するのはその女性の夫と思われる。…9番歌で彼女の周りに「嵐」が起るとしたのも、彼女が無理に都に留まろうとすれば、夫婦の間に悶着が生ずることを意味し、10番歌で「もみぢばをさそふ嵐」と詠まれているのは、やはり彼女を強引に同行しようとする彼女の夫を表しているのではないか。
南波浩『紫式部集全評釈』（昭五八・笠間書院）。以下『全評釈』と称する。

…この女性の「思ひ人」が官名を受けて地方へ赴任することになつたため、その男とともに地方へ行くか行くまいかと、思ひ悩んでいたのではなからうか。ということとは、その女性がまだ正妻といった間柄ではないため、同行しなければ二人の愛がこのまま途絶えてしまひはすまいか、という不安と、都育ちの身で、見知らぬ遠い他国へ行くことの不安とに、思ひ悩んでいたものと思われる。

伊藤博〈新日本古典文学大系〉『紫式部日記（紫式部集）』（平元・岩波書店）。以下『新大系』と称する。

おそらく夫が遠国の国守に任じられ、ともに下ろうか下るまいか迷っていたのであろう。

以上に見るように、列挙した七書は「夫の地方赴任に同行すべきか否かを思い迷う女友達」という共通理解で、見事なほど一直線に並んでいるのである。では、その解釈に立った場合、その他の歌句の解釈に際して不都合はあり得ないのであろうか。やはり、これらの注釈書等が論述してきたところを振り返ってみたい。少なくとも二つの疑問が生ずるのである。

八番歌の「もみぢ葉にかよへる袖の色」について、『新書』は次のように言う。

山里は人里より露が深く置くものだが、当時は「露」というと、「涙」を連想することになっていたので、露深い山里に籠って、涙にくれている姿を印象づけることになる。深紅の紅葉を贈って、私の袖はこれとそっくりの色なのです、血に染まっている私の袖をお見せしたいと言ってきた。中国の詩にごく普通に出てくる「血涙」、「紅涙」を翻訳して、「くれなるのなみだ」、「くれなるのそで」を歌に詠むことも、古今集以来定型化したつあったが、女性の表現としてはやはりなかなか激しいものである。

『紫式部集』にはこの歌とは別に「血涙」を詠み込んだ用例があ

るので、参考まで見ておきたい。それは、後に結婚することになると思われる男との一連の贈答群の中にあらわれる。

文の上に、朱といふ物をつぶつぶとそそきて、

「涙の色を」と書きたる人の返り事

三一紅の涙ぞいとどうとまるる移る心の色に見ゆれば

もとより人の娘を得たる人なりけり

「紅の涙」と詠んだのは式部であるが、それは文に朱を注いで「血涙」に見せかけようとした男の行為に促されてのものであって、女が自ら流す涙を血の色に見立てたものではなかった。八番歌の表現は『新書』の言うように、「女性の表現としてはやはりなかなか激しいものである」という感を否み得ない。

もうひとつ。いや、並列するのは妥当ではない。この疑問こそが本質的である。式部の返歌である九番歌の解釈の問題である。

八番歌の贈り主は、紅葉にかよう「紅」色の涙に染められた我が袖を見せたいという。それは詞書にある「はるかなる所に行きやせむ行かずや」と思い煩うがためであった。二者択一を迫られ、しかしそのいずれの道をも選び切れない懊悩の果ての苦吟として理解される内容である。その魂の奥底からと見える訴えに対する式部の返歌は、いったいかなるものであったか。

贈歌の「おく山里のもみぢ葉」を「遠山里のもみぢ葉」と型通り承けつつ、新たに「あらし吹く」状況を加えて、それゆえに些かも都に留まることは難しいことであろうよと、結ぶ。この辺りの解釈

もまた諸注ほぼ一致する。

・そうはおっしゃっても、とてもあなたが都に留まることはむつかしいことですよ、やはりご一緒に。(『評釈』)

・「遠山里」は友だちのいる山里を指し、激しい風が吹きすぎぶ山里の紅葉はほんのちよつとでも止っていることはむつかしいでしょうよ、風のまにまに吹き飛ばされてしまうでしょうよ、あなたは行かずに留っているなんてことはありませんまい、ということになる。(『新書』)

・風の吹く遠い山里のみみじの葉は、少しの間でも木に止つていゝことはむつかしいでしょう。そのようにあなたを連れて行くこととする力が強くては、都に留まることは困難でしょう。(『集成』)

・〈風吹く〉と半ばひやかして、そんなことをおっしゃっていても、結局、御主人とごいっしょに、お行きになるのでしょうとやり返した。(『解釈』)

・風の吹く遠い山里のみみじ葉に、露が留まっていることは、何ともむつかしいものですよ。そのように、あなたがわずかでも都に残ろうとなさつても、御身の周りに風が捲き起こつて、留まることはとてもむつかしいでしょう。(『國文學』)

・嵐が吹けば、すぐ吹き散らされてしまう遠山里のみみぢ葉と同様に、官命があれば、すぐにも遠い地方へ下つて行かねばならない受領階級の家族の一員である私たちには、そんな場合、都

『紫式部集』注釈史の忘れもの(久保 朝孝)

に留っているようなことはまったくむずかしいことなのですねえ。(『全評釈』)

・嵐が吹く遠い山里のみみじ葉は、ほんの僅かな間も木にとどまることがむずかしいように、あなたを連れ去ろうとする激しい力のもとでは、都にとどまることは困難だと思いますわ。(『新大系』)

しかし、それでいいのだろうか。

「夫の地方赴任に同行すべきかを思い迷う女友達」の、苦悩の底からの訴えに対して、思い迷うこと自体の無意味をあからさまにし、結局は運命に従うほかはないとも言うべきこの返歌から伺える式部の態度は、あまりにも友人に対して冷淡過ぎないであろうか。すでに「評釈」は、「紫式部の返歌は冷静で」とあると言い、また「新書」は、「はなはだ客観的な、成り行きを冷静に見通した歌である」と言っている。それはまったく自然な理解又は感性の所産であつて、私もまたそう感じるために違和感を拭い得ないのである。

この点については、夙に今井源衛に言及がある。今井はこの贈答を父為時の赴任に伴う式部の越前下向時前後のものと考えており、そうすると今井の出生年説(九七〇年)によればこれは式部二七歳の折の詠歌となり、また女友達を子持ちの年長者とするなど、現在の伝記研究及び注釈上の共通理解とは懸隔があり、問題を抱えているとはいふものの、女友達への返歌としての不自然さを指摘したものと注意を払っておきたい(傍線部)。

…式部自身も遠地に赴く身であるにかかわらず、一向に相手に同情を示さないうで、むしろ感傷を棄てて冷静に物事を考えなさいと説得する感が強い。…相手の方が子持ちの年長であるのにひどく感傷的・情緒的であるのに対して、式部は一貫して、冷淡と解されるのも無理からぬほど、悪く言えばそっけなく情が薄く、よく言えば知的で冷静である。これは彼女の二十七歳という年齢とそれまでのいろいろの体験や深い教養によるものだと一応言えるだろう。(『人物叢書』『紫式部』昭四一・新装版

六〇・吉川弘文館)

さて、このような不自然を自覚してしまつたなら、注釈者はいかにしてこれを解消しようとするであろうか。ひとつは、不自然ではないとしてその理由を求めようとするものであり、もうひとつは、不自然を招いた前提に対する見直しを図ろうとするものとなるであろう。前者の立場から説くのが、次の二注釈書である。

・たしかに別れていく友達ほどに、式部は感傷的ではないかもしれない。しかし彼女の態度がそんなに「冷淡」「冷静」とだけはいえまい。7番歌にも、上述のごとき、人間的共鳴の底に流れているのをうかがい見られるし、9番歌は、夫の赴任に従つて都を離れなければならない、女友達の運命の厳しさを、式部が強く相手に訴えれば訴えるだけ、それは式部にとつてもまた否応なく淋しい別離をもたらず、そんな人生の悲しい仕組みを如実に感じさせるのである。(『國文學』)

・地方へ下ることになった受領層の官人を、夫または愛人として持つこの女友だちの切実な悩みの訴えに対する、式部のこの返歌は、一見、あきらめにも似た、冷たい返歌、あるいは冷静に、相手にあきらめるように説得しているかのようにとられやすいが、しかし、この友にこのような悩みをひき起こさせた、夫または愛人への地方赴任の官命には、私情をさしはさみ得ない受領層としての悲哀を、式部自身も他人ごととは思えない、階層的連帯感をもつて受け止めていたと思われる。「露もとまらむことのかたさよ」という下旬の表現は、冷静な説得性を示すようなものではなく、友の苦境に対する連帯的な慨嘆とみられる。それは、自分自身を友と同じ姿においてみる眼であり、友の悩み・悲しみを、自分自身のこととして見る眼である。(『全評釈』)

傍線部は、いずれも私が理解し難い部分であり、作品本文に直接その根拠を見出しにくい観念論との印象が強いのであるが、しかしそれはそれとして、これが「はるかなる所に、行きやせむ行かずや」と、思ひわづらふ人」を「夫の地方赴任に同行すべきか否かを思い迷う女友達」と理解した場合における、解釈作業の極北に位置するものなのである。今、その是非は問わない。

では、もう一方で、不自然を招いた前提に対する見直しを図ろうとする作業は行われているであろうか。現段階では皆無である。ところが幸いなことに、この「前提」に対する疑義は、注釈史の最初期にすでに見られるものであった。本稿始発部における「評釈」

引用の第一文をあらためて思い出してみたい。

：同性の間での贈答歌と見るか、異性の間での恋の贈答と見るかで解釈が異なってくる。／私は同性の女友達との贈答と見た。『評釈』は、またその【評】において、「たゞ8の歌に恋の句があるが」と刮目すべき指摘を行い、さらに次のように説く。

恋の贈答とすると、8は男が、君恋う涙で染まった袖を見せたい意。9は紫式部が軽くかわして、嵐に吹かれる紅葉のように、私に心はとめがたいと瀬踏みする歌。10は他からしきりに誘われるけれど、あなた以外には心を移すことではないと一応解されるが、詞書の、「行きやせん行かずやと思ひわづらふ人」を男性と見る点がひつかゝる。また、10の歌の「もみぢばをさそふあらしは早けれど」も、男が自分で言うのはいかゞであろう。さらに『全評釈』も、この可能性に言及している。

一体、この贈答の主は、男性なのか女性なのか。もし、男性官人であれば、官命による地方赴任であり、それはたとえ遠地でも、出世昇進の段階としてむしろ歓迎すべきことでもあつたらう。また、仮りにその男が式部を思慕する人であつて、地方赴任にあたって、式部への思慕の情を、たとえこのような形で表明してきたとしても、式部自身はその詞書に「行きやせむ行かずや、と思ひわづらふ人」などと、もつともらしい表現はしないだらう。したがつてこの贈答の主は、男性とは思われない。それぞれに、男との贈答とする場合の疑問を二つずつあげている。

『評釈』の最初の疑問、「行きやせん行かずやと思ひわづらふ人」を男性と見る点がひつかゝる」のは、『全評釈』のそれに重なる。

しかしながら、これは当人が地方官に任命されたもの、という、すべての注釈書が陥っている暗黙の前提を打ち破つてしまえば、解決は容易である。今井前掲書『紫式部』には、次のような記述が見える。九九六年、紫式部の父藤原為時は越前の国司として下向する。

秋も末になつて、為時は式部を伴つて赴任の途についた。惟規は二十五歳（久保注・新大系等に示される通説では、この年紫式部二十四歳、惟規二十三歳）、まだ文章生として、半ば修業中の身であり、京に留まつたらしい。

ということとは、（越前）国司（藤原為時）がその男子（惟規）を任地に伴うことがあり得た、と読み得るであろう。いや、もつと直接的な材料をあげなければなるまい。天喜五年（一〇五七）七月三〇日、橘俊通は信濃守に任せられ、八月二十七日に任国へ向けて出発する。その旅立ちの様子が、その妻によつて記されている。

二十七日に下るに、をとこなるは添ひて下る。紅の打ちたるに、萩の襖、紫苑の織物の指貫着て、太刀はきて、しりに立ちて歩み出づるを、それも織物の青鈍色の指貫、狩衣着て、廊のほどにて馬に乗りぬ。（『新潮日本古典集成』『更級日記』による）

これによれば、橘俊通・菅原孝標女夫婦の長男仲俊は、父の任地に同行しているのである。時に仲俊は十六、七歳。男性当人が「はるかなる所に、行きやせむ行かずやと、思ひわづらふ」ことは、こ

のようにして可能なのである。

『評釈』のもうひとつの疑問は、「10の歌の『もみぢばをさそふあらしは早けれど』も、男が自分で言うのはいかゞであろう」ということであつたが、これは『評釈』が可能性としての男女の恋の贈答について考察する時に、「八番歌の詞書「はるかなる所に……」を失念してしまつてるところから生じたものとも見られ、また男を地方赴任者の息として理解することにより同時に解決されるものであつて、格別顧慮するには及ぶまい。

もうひとつ、『全評釈』が「式部自身はその詞書に『行きやせむ行かずや、と思ひわづらふ人』などと、もつともらしい表現はしなうであろう」としているところであるが、これは、当然あつたであろうその男からの手紙に、そのような内容のことがおそらく綿々と記されていたので、それを要約したということではないのか。詞書は、家集の読者を想定してまとめられるものであるのだから。

以上、八、十番歌の詠者が（当然恋の対象としての）男に懸想人である可能性について論じてきた。前後の歌の配列からみるならば、贈答が交わされたのは式部成人前後の時期とならう。

ところで私は、「これは当人が地方官に任命されたもの、というすべての注釈書が陥っている暗黙の前提を打ち破つてしまえば、解決は容易である」と前に述べた。その立場によるこれまでの諸注釈批判であつた。ところが、「すべての注釈書が陥っている暗黙の前提」をそのまま肯定した場合においても、これを男女の贈答とする

可能性は決して閉ざされてはいないのである。『源氏物語』『竹河』巻、玉鬘が鬚黒との遺児「大君」を冷泉院妃として参院させた後、その妹「中の君」を今上帝の後宮に尚侍として送り込む場面を見てみたい。「大君」に懸想していた藏人の少将には、姉に代えて妹の「中の君」をとのほめかきを反故にした玉鬘が、少将の父夕霧右大臣に弁解する場面である。

「内裏よりかかる仰せ言のあれば、さまざまにあながちなるまじらひの好みと、世の聞き耳もいかがと思ひたまへてなんわづらひぬる」と聞こえたまへば、「内裏の御気色は、思し咎むるも、ことわりになんうけたまはる。公事につけても、宮仕したまはぬは、さるまじきわざになん。はや思したつべきになん」と申したまへり。（本文は〈新編日本古典文学全集〉による）

玉鬘は（帝から姫君入内の意向をかねてより再三伝えられていたが）、今回の実質的後宮入りは勅命によるとする。姉妹が院・帝のもとに相次いで嫁することを、分に過ぎた縁組だとして世間が厳しい評価を下すのではあるまいかと危惧するために、彼女は思案に迷い苦悩しているというのだ。勅命を盾に取られては、夕霧に抗弁非難の余地はないのであるが、この場合夕霧の態度が問題なのではない。玉鬘が自ら「わづらひぬる」と発言していることを見過ごしてはならないのである。夕霧が黙り込んでしまったように、「繪言汗のごとし」、抗うことの許されないのが勅命なのであつた。また、物語はこの場面の直前に「そのこと（玉鬘の願ひである）中の君」

の尚侍としての出仕) かなひたまひぬ」と語って、「中の君」の實質の後宮入りがすでに決定済みであることを明らかにしているのである。玉鬘は何を苦悩する必要があるか。勅命への諾否に揺れるとする彼女の苦悩は、実は夕霧の許諾を得るための擬態以外の何物でもなかったのである。

官命(勅命)を受けながら、「思ひわづらふ」と訴える例があり得ることを述べた。さらに言うなら、そもそも「血(紅)涙」とはいかなる時に流されるものであったのか。

漢皇重色思傾国

.....

宛転蛾眉馬前死

花鈿委地無人収

翠翹金雀玉搔頭

君王掩面救不得

回看血淚相和流

黃埃散漫風蕭索

.....

(新編日本古典文学全集)『源氏物語』①付録による)

右の『長恨歌』の例に見るように、回復不能の絶望的悲嘆の極みの表現として用いられるものであったはずである。「逡巡」に「血涙」は似合わない。贈歌の詞書に言う「思ひわづらふ」心的擬態と、詠歌そのものが暗示する不可逆的選択不能の現実との落差を素早く

『紫式部集』注釈史の忘れもの(久保 朝孝)

察知し、その間隙に鋭く切り込んでいく激しさを、この返歌は確かに含んでいる。この勢いに押される形で、「この下ならで行く心かは」が導き出されるのである。現実の問題として地方へ下向したかどうかが問題なのではない。逡巡に対する厳しい追及、そして追及に対する弁明又は決意の確認という、九番歌を中に置いたこの息詰まる(典型的な)恋の贈答の呼吸又は攻防への愛惜こそが、編者紫式部がこの三首をこの位置においた理由であっただろう。

なお、第十番歌の「この下」は「此の下」で、おおかたの注釈に言うとおり「式部のいる都」の意と取ってよいと思うが、さらに後考を俟つことにする。また、第八番歌の贈り主が「山里」にいることについて、私は明解を持たない。これも後考を俟ちたい。